

眠くなる時刻を待った。

雪の夜の山中は、咳一つの物音もなく、静かに静かに更けて行った。

小さな欠伸を一つすると、莊吉はやがて寝る仕度に掛った。と、其時、戸口の外に雪を払ふやうな気配がすると思ふと、がらりと大戸が開いて雪まみれの男の姿が入って来た。

「お父っあんか？」

莊吉は吃驚して立上った。暗い行燈の灯にすかして見ると、合羽に積った雪を敲き落して、凝つと此方を睨んだ人の顔は、父親には似てもつかぬ顔であつた。

「……………」

莊吉はハツとして立竦んだ。

「お前一人か？」

戸口の男は咎めるやうに声を掛けた。

「え、独りだ。あんたは？」

「さうか、俺は旅の者だ。この雪に宿を取損ねて困つてみると、この灯を見つけて突然に飛込んで来たが、驚かして済まなかつた。」

莊吉は、戸口の男が寒さに震へてゐるらしい様子を見ると、気の毒になつて、囲炉裡の傍へ男を上げた。

「忝けない。」と、男の人は嬉しさうに火の上に両手を翳して莊吉の顔を凝と見た。

莊吉はどん／＼薪をくべたした。囲炉裡の火は、やがて旅人の顔を真赤に照しだした。

「お客さん。」

暫くの間無言でゐた莊吉はかう旅人を呼んだ。

「お客さん、腹が空いてるかね。」

「あ、何か食べ物があつたら、何でもい、食はして貰へるか
ね。」

「飯なら炊くばかりだ。」

「さうか、それは気の毒だな。」

「何、わけないよ。」

莊吉は快く、朝飯の仕度をした鍋を囲炉裡の上に掛けた。

やがて鍋の中の米がふつ／＼と煮立つ頃になると、莊吉も心置きなく旅人と口をきくやうになつた。旅人の話では明日は早く山を越して隣村へ下りたいといふ事だつた。

莊吉の炊いた飯を食ふやうに食べ終ると、

「あ、甘かつた。有難い。」と、ほつとしたやうに旅人は息をついた。そして囲炉裡の灰の中へぼたぼた涙をこぼした。

莊吉は驚いて客の顔を仰いだ。

「ハハハ……あまり有難くて涙を落した。俺は明日の朝あんたと別れ、ばもう一生の中二度と会ふ事はないかも知れぬが、今夜あんたに親切にされた事は俺は死ぬ迄忘れんだらう。あんたも早く出世して偉い者に なんかさい。」

「え、お客さん、もう床を取りませうか、お父っあんの床だ
けれど。」と、莊吉は客に訊ねた。

「いや、俺はこゝで結構だ。もう少し囲炉裡で温まろう。あんた眠いだらうから眠みなさい。俺が朝まで大丈夫番して上げや